

全国ボッチャ選抜甲子園 競技規則

第1条 原則

第1項 心構え

ボッチャの競技を行う際の心構えは、敵・味方に関係なくよいプレーは称賛し合うことである。一方でミスを責めるような言動は、自チーム、相手チームに関わらず、選手・観客・指導者全てにおいて控えること。また、賞賛する場合を除いて、静粛に観戦することが望ましい。

第2項 写真撮影

フラッシュを使用した写真撮影は認められない。試合の動画撮影は認めるが、FOP 内における撮影については、審判長または大会技術委員長の承認を得た上でのみ設置可能とする。また原則として大会の映像の権利は主催者に帰属するものであり、SNS 等を利用した個人による公開は制限される。

第2条 選手

第1項 ボッチャの選手

ボッチャの選手は、肢体不自由者とする。

第2項 ボッチャの障害区分

- (1) 全国ボッチャ選抜甲子園の障害区分は、すべて自己申告とする。
- (2) ボッチャの区分は、すべて投球時の姿勢を基準とする。
 - ① 車椅子使用者・座位者
 - ② 車椅子使用者・座位者で、投球はできるが、支援なしに車椅子の方向を変えたり、床のボールを拾ったりすることが機能的に困難な選手。1選手に1名、スポーツアシスタントが認められる。
 - ③ 車椅子使用者・座位者で、投球そのものが機能的に困難で、勾配具(ランプ)を使用して競技する選手。1選手に1名、ランプオペレーターが認められる。
 - ④ 立位で競技を行う選手。競技においては、日常的に車椅子を使用している者でも、投球時に立っているかどうかで判断される。

第3項 選手の帯同者

以下の者は試合中、または試合前後の選手の支援をするため、コートに帯同することが認められる。ただし選手の意思を離れて競技に介入することはできない。

(1) スポーツアシスタント

前項(2)-②選手に対して支援を行う者。投球時にボールを渡す、車椅子の方向を変えるなどを行うが、選手の指示なしに行動することはできない。選手が自分の持ち時間に支援の指示があるとき以外は、投球ボックスの後方に待機する。

(2) ランプオペレーター

前項(2)-③の選手に対して支援を行い、選手の指示通りにランプ操作を行い投球の補助を行う者。競技中は常にコートに背を向け、コートの様子を見ることはできない。

(3) コーチ

全国ボッチャ選抜甲子園大会において、選手はコーチとともに試合に参加することができる。コーチは選手が投球ボックスに位置した時点から常に定められたエリアで待機しなければならない、選手に一切働きかけることはできない。ただしエンド間には限られた時間の中、選手に簡単なアドバイスはできる。またコーチは円滑な試合進行に協力しなければならないため、エンド後のボールの回収などには積極的に行動する必要があるとともに、審判から促された場合速やかに定められたエリアに戻らなければならない。

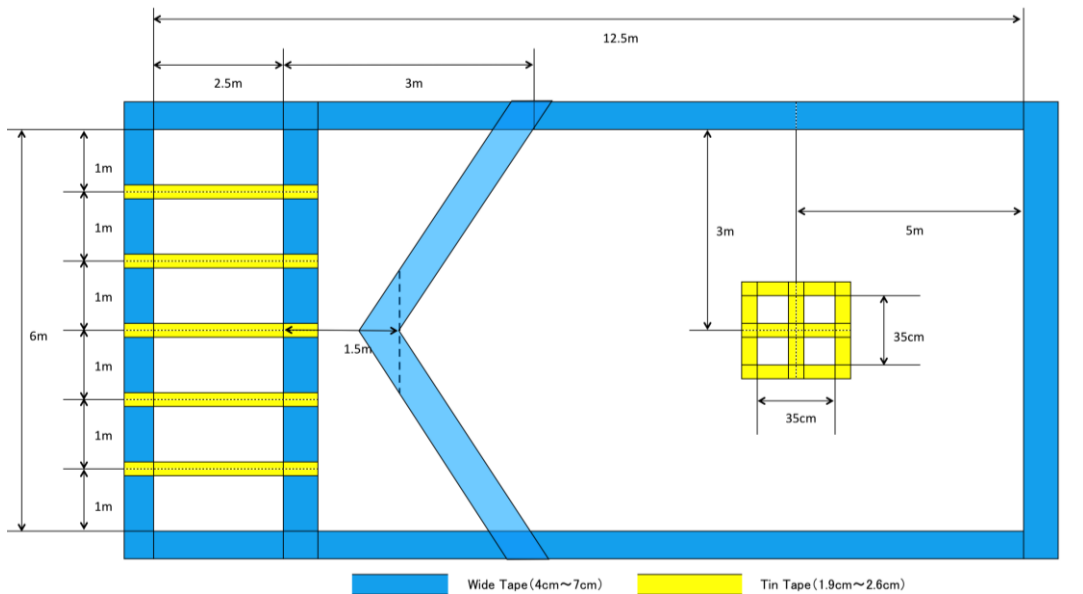
第3条 競技場

第1項 競技場の条件

競技場の表面は、平坦でなめらかであること。

第2項 コート

- (1) コートの寸法(内寸)は、12.5m×6m である。
- (2) コートのラインテープは、外側のライン、投球ライン、V ラインには4cm 幅のテープを使用し、投球エリア内を区切るラインとクロスは 2cm 幅を使用する。
- (3) ターゲットボックスの規定サイズ:長さ35cm で、幅 2cm のラインテープを使用してクロスを作成し、その外側に内寸で 35cm となる正方形を作成する。



第4条 競技用具

ボッチャにおいて、競技用具は原則として選手自身が用意し大会に参加する。

第1項 ボッチャボール

- (1) ボッチャボールは、赤色ボール6個、青色ボール6個、白色のジャックボール1個で構成される。
- (2) ボッチャボールの大きさの基準は以下の通り。
重量:275g±12g
周長:270mm±8mm
- (3) 選手自身がボールを試合に持ち込まない場合は、招集時に審判に申告し、試合ごとに大会主催者から借用することができる。
- (4) あきらかにボールの大きさや重さが基準と異なったり、ボールの色が赤色、青色、白色と異なる色味をしていると審判が判断した場合、選手は対象のボールの使用を止め、大会主催者からボールを借用して競技をしなければならない。
- (5) 借用するボールは試合ごとに返却しなければならない。ボールの硬さや種類を指定することはできない。大きさ、重さの基準に準じていれば、競技に個人のボールを使用することができる。また、大会主催者が用意するボールを使用することもできる。

第2項 投球補助具(ランプ)

- (1) ランプは、ボールを投げることのできない選手が勾配を用いてボールをコートに送ることを目的としたものであり、ランプの操作や車椅子の角度調整などをオペレーターに指示することも競技の技術である。そのため、ランプオペレーターは選手との連携の中で競技用具を扱わなければならない、直接競技に介入することはできない。
- (2) 選手は投球をする際にはボールに触れたり、押したり自分自身でモーションをおこななければならない。そのため投球に機械的な補助を設ける機器(スイッチで自動投球する機器、ジョイスティックでランプの方向

- を決める機器等)をつけてはならない。また、加速や減速をする機器、照準器をつけてはならない。
- (3) ランプは、付属品、延長部、基本部分を含めて最大最長の状態にして横に倒したときに、2.5m×1m のエリア内に収まるような寸法でなければならない。
 - (4) ランプは、上記(2)及び(3)の条件のもと、選手が準備したものを使用し、自身でランプオペレーターを同行させること。

第3項 その他の用具

- (1) 全国ボッチャ選抜甲子園大会において、選手全員に対する競技用具検査は行わない。
- (2) 審判があきらかに用具の特殊性、基準より逸脱している可能性があると判断したとき、特別に競技用具検査を行うとともに、大会主催者と協議し選手のボールや用具の使用を中止させることができる。

第5条 試合方法

全国ボッチャ選抜甲子園は、すべて団体戦で行われる。また、試合は全て男女の区別なく行われる。

第1項 チームの構成

- (1) 試合は、3人1組で構成されたチームにて行われる。
- (2) 構成されるチームには、試合中いかなる場面でも、車椅子の選手が最低1名は出場していなければならない。
- (3) 1名は主将として腕章を装着して試合を行う。
- (4) 各チームは、試合に出場する3人1組に加え、控え選手を1名まで用意することができる。
控え選手はエンドとエンドの間に交代することができる。ただし、コートには必ず車椅子の選手がいなければならない。
- (5) 交代をしてコートの外に出た選手はもう一度コートに戻る事はできない。
- (6) 同一試合中の投球ボックスの変更は、いかなるタイミングにおいても認められない。

第2項 競技手順

競技は、以下のような手順で進められる。

- (1) 競技の準備
競技を開始するにあたって、審判の指示のもと主将は、選手のうちの選手が最初の段階で競技をするのか、補欠が誰であるのかを申告する。次にコイントスにて投球順序(使用するボールの色)がどちらとなるかを決定する。
- (2) ボールの準備
選手は、どちらのチームも自分たちが使用する色のボールを、補欠も含めて2個、合計8個まで持って試合に臨むことができる。また、ジャックボールは各チームに1つだけ用意することができる。これより多いボールを試合に持ちこんではならない。
- (3) 投球位置への配置
選手は競技を始める際に審判に誘導を受けながら投球位置に配置される。投球位置は、コートに向かって左から、赤、青、赤、青、赤、青の順で投球ボックスに配置される。
なお、コーチ及び補欠選手は、投球ボックスから遠い位置のコート外に配置される。
- (4) 投球練習(ウォーミングアップ)
試合を始める前に、各チーム6球の自ボールと、1球のジャックを2分以内で投球練習することができる。ジャックボールはチーム内の誰が投げてもよい。自ボール6球と、1球のジャックを全て投げ切るか、2分が経過したとき、投球練習は終了される。
- (5) 試合開始の宣告
審判は、赤、青両チームが投球位置に配置されていることを確認した後に、互いにあいさつを促す。次にジャックを赤チームの主将に手渡し、コート外に出ると「ジャック(プリーズ)」という号令をもって試合の開始を宣告する。
- (6) 目標球の投球
赤チームの主将は、審判が試合の開始を宣告した後に、コート内の任意の箇所に投球する。この際、

コートを区切るラインを越えたり、Vラインを越えない場合はアウトボールとなり、ジャックの投球権は相手チームに移る。ランプ使用者がジャックを投球する場合は、ジャックを投球する前にランプを2方向にしっかりとスイングさせなければならない。

(7) 第1球目の投球

ジャックをコート内の任意の箇所に投球できた場合、ジャックを投球した選手がそのまま自ボールの第1球を投球する。このとき、第1球目がコートを区切るラインを越えてしまった場合は、同じチームの任意の選手が自ボールをコート内に投球することができるまで投球する。

(8) 第2球目の投球

ジャックを投げたチームが自ボールの第1球目を投球できたら、相手チームの任意の選手が相手ボールの第1球目を投球する。このとき、相手チームの第1球目がコートを区切るラインを越えてしまった場合は、同じチームの任意の選手が色ボールをコート内に投球することができるまで投球する。

(9) 第3球目以降の投球

両チームの色ボールが投球されたら、ジャックに対してより遠い位置に配置されたボールを投球したチームが投球する。ジャックに対しての遠近の配置が入れ替わったとき、投球するチームも入れ替わる。これは、投球するべき手持ちのボールが全て投げ終わるまで行われる。

(10) 各チームの持ち時間

ジャックを含めた各チームの持ち時間の合計は、1エンドあたりそれぞれ5分ずつとする。持ち時間とは、審判が計時に投球するチームを指示してから、投球されたボールが停止する、ないしアウトになるまでの合計を指す。この時間の中であれば、選手はコート内に入ってボールの配置をチェックしたり、選手同士で相談したりすることができる。ただし、コーチやスポーツアシスタントランプオペレーターが相談に合流はできない。

なおランプ使用者は、(自分がコートに入ったかどうかに関わらず)投球を再開する際には必ずランプを2方向にしっかりとスイングしなければならない。

(11) エンドの終了、点数の計算

両チームの投球するべき手持ちのボールが全て投げ終わったとき、審判はエンドの終了を宣告する。

審判は試合の終了を申告した後、第1エンドの獲得点数の計算を行う。点数の計算の方法は以下の通りとなる。

- ① ジャックに一番近い色ボールを投球したチームが勝利者チームとなり、得点を得る。
- ② 勝利者チームの相手チーム(敗者チーム)で、ジャックにもっとも近いボールを基準とし、そのボールとジャックの距離より内側にある勝利者チームのボールが、全て得点対象となる。
- ③ ジャックに一番近い色ボールが両チームとも同じ距離に配置されている場合、チームに関わらず、そのボールは全て得点の対象となる。

審判が得点の計算が終わったら、選手と観客にエンドの点数が宣言される。点数が宣言され、審判に促された後、ランプ使用者のランプオペレーターはコート内を見ることができる。ただし、試合の結果に介入する(審判に意見をいう)ことはできない。

(12) エンドとエンドの間

エンドが終了し、次のエンドに移る間に、ボールは選手の手元に開始時と同じように戻される。

このとき、必要に応じて控え選手との交代をすることができる。ただし、コートには必ず車椅子の選手がいなければならない。

エンドとエンドの間では、選手の必要に応じて水分を補給することはできるが、審判に次エンドの準備を促されたら、速やかに試合準備を完了しなければならない。また、試合の準備に入ってからランプ使用者のランプオペレーターがコート内を見て狙いを定めてから次のエンドを迎えてはならない。

(13) 次エンドの実施

ボールが各選手の手元に戻ったのち、次のエンドが行われる。次のエンドでは、ジャックを青チームの主将に手渡し、以後は第1エンドと同じ手順で行われる。

(14) 勝敗

競技は、2エンドマッチまたは4エンドマッチで行われ、すべてのエンド終了時の総得点の高いチームが勝者となる。エンド数は大会主催者の判断により設定される。

(15) 同点時の対応

すべてのエンド終了時に同点だった場合は、コート中央の十字の交点にジャックボールを配置し、1球ずつ投球して目標球により近いボールを投球した方を勝者とする(ファイナルショット制度)。

この場合の投球順序は、エンド開始前にコイントスで決められ、先に投球するチームのジャックが使用される。ファイナルショットは、主将となる選手が、自分のボックスから投球する。ランプ使用者が投球する場合、投球の前にはしっかりとランプを2方向にスイングさせてから投球しなければならない。

(16) 競技の終了

競技が全て終了し勝敗が決したとき、審判は選手に勝敗と得点の確認を図り、承諾サインを得る。承諾サインを得たのち選手は審判に誘導を受けてコートから退出する。

第3項 違反行為

以下の違反行為に対しては、違反の内容に応じて審判から罰則の指示を受ける。なお、すべての違反は投球したボールは無効となり、アウトボールとなる。

*ペナルティボールは行われぬ。

- (1) ラインを踏んだり、越えた状態で投球する。
- (2) 審判の指示がある前に投球する。または審判の指示のないチームが投球する。
- (3) ランプ使用者が以下の場面で投球する前に、ランプを2方向にしっかりとスイングせずに投球したとき。
 - ① ジャックまたはエンドの初球を投球する前
 - ② 自分のチームがコートにボールを見に行った時
 - ③ ファイナルショットの前
- (4) ランプオペレーターが試合中にコートを見たり、選手に指示をしたり、競技に介入する所作を審判が認めたとき(良いプレーを賞賛するだけならよい)。

大会主催者や審判が、選手やコーチ、スポーツアシスタントやランプオペレーターの悪質、意図的な違反やスポーツマンとして望ましくない態度があると判断した場合、イエローカードやレッドカードが提示される。イエローカードが同一の大会で2枚出された選手、またはレッドカードが出された選手、コーチ、スポーツアシスタントやランプオペレーターは、その時点で以後の対象の大会の試合に出場することができない。

第6条 その他

大会主催者は、本規則に網羅されていない特定の状況が起こった場合、主催者及び大会技術委員長によって判断される。

また大会主催者は社会環境や社会状況を鑑みて、大会ごとに大会申し合わせに設けたり、規則を変更したりする場合がある。

補足資料 1 用語の定義

スポーツアシスタント	手投げ選手、足蹴り選手で、選手自身でボールを掴む、握るなどの動作が困難な場合に設置することができる補助者。
ランプオペレーター	ランプ使用選手が競技で用いる器具操作を行う補助者。
コーチ	競技場に入ることができ、エンドとエンドの限られた時間で、選手に対して助言を行うことができる者。
ボール	赤色ないしは青色のボール、あるいはジャックボール
ジャック (ボール)	ターゲットとなる白いボール。
大会球	マイボールを用いない選手/サイドが使用する、大会主催者が準備するボールセット。
デッド (アウト) ボール	投球されたり、弾かれたりしてコートから出たカラーボール。または反則行為により審判から除去されたボール;時間切れにより使用されなかったボール、または選手が投球しないと決めたボール。
ペナルティボール	全国ボッチャ選抜甲子園大会においては、適用されない。
2方向へのスイング (2ウェイスイング)	少なくとも左に 20cm、右に 20cm、ランプをはっきり動かすこと。
アウトオブザウェイ (投球時の配慮)	選手、ランプオペレーターは、競技用具が対戦相手の投球の邪魔にならないよう、競技用具を移動させたり、ボックス内で後ろに下がったりしなければならない。
ウォームアップエリア	試合を行う前に、選手がウォームアップをするためのエリア
コールルーム	各試合前に選手が試合登録をする場所。大会によっては設けずにコートサイドで受付をする場合もある
Field of Play (FOP)	全てのコートが含まれるエリア。ここには計時員の計測場所も含まれる。
コート	投球ボックスも含んだ、各試合が行われるエリア。
プレイングエリア	コートからスローイングボックスを除いたエリア。
投球ボックス	選手が投球する、6等分され番号がついたボックス。
投球ライン	選手が投球する際、越えてはならないコート上の線。
Vライン	コートを横切る線で、競技を行うためにジャックが完全に越えなければならない線。
クロス	ファイナルショット時にジャックが配置されるプレイングエリア中央のマーク。
ターゲットボックス	クロスに設置された 35cm×35cm のボックス
試合	2つのサイド間で競技すること。
エンド	一つの試合の中で、両サイドが、全てのボールを投げ終わるまでのひと区切り。
反則	選手、サイド、競技アシスタント、ランプオペレーターまたはコーチによる罰則を伴う競技規則に違反する行為。
競技用具	ランプ、グローブ、スプリントやポインターのような補助具。